COMMUNE 2nd
RAW TOKYO

TOKYO MEGANE FESTIVAL

Oh! My New Eyes!

Come together, with New Eyewear!

Paper

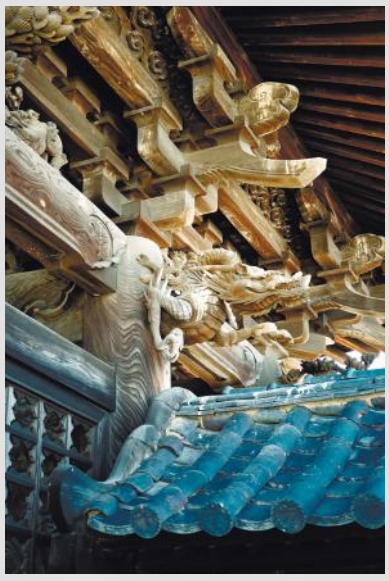
p.3_HISTORY | 福井・鯖江のめがね史　p.4_TECHNOLOGY | 進化を止めない鯖江の技術　p.6_COOPERATION | 産地を支える縁の下の力持ち　p.7_DESIGN | デザインの鯖江になるために　p.8_RAW TOKYO Collaboration Glasses

MARKET 12.01 SAT-12.02 SUN 11:00-17:00 at RAW TOKYO

TOKYO MEGANE FESTIVAL　OPENING PARTY　2018.11.30 FRI 17:00-21:00 at COMMUNE 2nd

SABAE

きっぷ売場
敦賀・大阪・米原 方面
for Tsuruga, Osaka, Maibara
特急サンダーバード22号 13:15 大 阪 3
普通 13:27 敦 賀 3
特急しらさぎ 60号 13:45 米 原 3
12:51 Kanazawa 1
13:24 Kanazawa 1
13:29 Fukui 2
タッチ



1050円

アクロード・コマチ
古町
アクロード・コマチ

FUKUI MEGANE SABAE

「そのめがね、どこから来てる？
めがねの"産地"を見に行こう！」

生活必需品として、
またファッションアイテムとして、
多くの人々の生活になくてはならないめがね。
その9割以上が福井県鯖江市で
作られていることをご存知だろうか？
百年以上のめがねづくりの歴史を有し、
鯖江市では、就業人口の6人に1人が
めがね関連の仕事をしているという、
まさにめがねの聖地。
では、めがねとはどのように
作られているのだろうか。
一本一本のめがねの奥にあるストーリーと
めがねの先にある未来を見に行こう。

HISTORY 福井·鯖江のめがね史

History

episode 01

「黒船に乗せられためがね」

1600年初頭、長崎の出島に黒船によってめがねが持ち込まれる。徳川家康に献上され、江戸の職人たちに広まり、のちにめがねが日本で作られることになった。

1551年
イエズス会の宣教師
フランシスコ・ザビエルが来日。
日本にめがねを伝える

1600
1600年代
水晶玉の職人が
めがねのレンズを
作り始める

1800
1800年代後半
機械でのレンズ製造技術の
確立。日本で安価な
めがね製造のスタート

1905
1905年
福井の実業家
増永五左衛門により、
福井でめがねの製造が開始

1911
1911年
内国共産品博覧会に出品した
福井産のめがね枠「赤銅金継眼鏡」が
有功一等賞金杯を受賞

1916
1916年
福井産レンズが
初めて製造される

1921
1921年
福井でも動力モーターを導入

1928
1928年
木村菊次郎らにより、
福井で金張り枠の製造が始まる

1941
1941年
戦時体制下、めがねの材料に金を
使用することが禁止される

1958
1958年～61年
相次ぐ好況の波で福井産のめがねの量産体制が整う

1983
1983年
世界初となるチタンフレームが完成。
福井県内の各社から商品化される

1994
1994年
福井産地メーカーの海外進出増加

2003
2003年
福井産地ブランド
「THE291」を立ち上げる

2005
2005年
産地生誕100周年を迎える

2008
2008年
福井県眼鏡協会東京ショールーム
「GLASS GALLERY291」が南青山にオープン

episode 02

「産地の基礎を築いた キーマン登場」

1905年、福井県のめがね産業の創始者である増永五左衛門が、めがねは多くの人々の必需品になるという先見のもと、農閑期の副業として、少ない初期投資で現金収入が得られるめがね枠作りに着目。当時、めがね作りが盛んであった大阪や東京から職人を招き、近在の若者にめがねの製造技術を伝えたことが始まりである。素材には銅や真鍮が使われ、「帳場」とよばれる職人グループごとにめがねが作られ、その帳場ごとに職人が競い、腕を磨くことで分業独立が進んだ。

episode 03

「鯖江めがね最盛期」

戦後の高度経済成長の中ではめがねの需要も急増し、産地として大きく成長する。めがね製造の自動化などにより生産効率を追求すると共に、品質の向上と技術開発に力を注ぎ、80年代、世界で始めてチタンを用いためがねフレームの製造技術の確立に成功。軽量かつ耐久性に優れるチタンは、金属アレルギーを起こしにくい素材であることから、人体に優しいものとして世界に広まった。

episode 04

「世界を代表する産地として」

2003年、産地統一ブランド「THE291」の誕生。そして、2005年に産地生誕100周年を迎えた。産地のめがね製造の技術力そのものが世界で高い評価を得て、今やめがねフレーム生産シェアは、国内の約96%を占める。近年では、高いデザイン力とブランド力を持つイタリアと、低コストでの大量生産を得意とする中国とともに、世界3大産地の一つとして確たる地位を築いている。

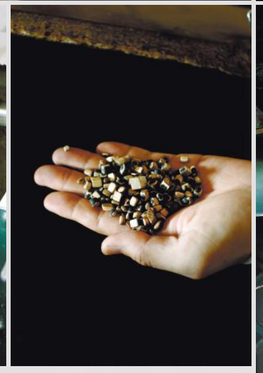
GLASS GALLERY 291

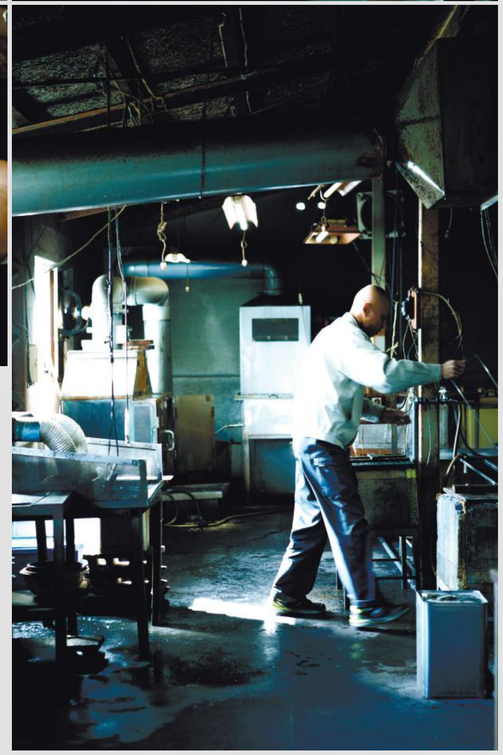
Glass Gallery 291
〒107-0062 東京都港区南青山3-18-5
モンテプラザ南青山
営業時間：11：00～20：00
定休日：年末年始（適宜ウェブにてご案内）
Tel：03-6459-2912

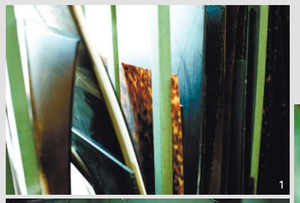
TECHNOLOGY

止めない進化を鯖江の技術

Technology







1_ サンオプチカル株式会社にはプラスチックフレームのもとになるシート状の樹脂が大量に保管してある。中には、劣化し硬くなっているが、45年前のアセテート素材まである　2_ バレル研磨機。中には木片が入っており、めがねフレームを機械の中に入れ一晩回すとフレームにツヤが出る　3_ オーダーメイドを受けるサンオプチカル株式会社では、めがねの型を手で削ることも

Company

竹内光学工業株式会社
福井県鯖江市杉本町35-150-1
takeuchi-opt.co.jp

サンオプチカル株式会社
福井県鯖江市杉本町802-5
sunoptical.co.jp

株式会社シャルマン
福井県鯖江市川去町6-1
www.charmant.co.jp

株式会社三工光学
福井県鯖江市北野町2-13-12
www.sankokogaku.co.jp

Interviewee

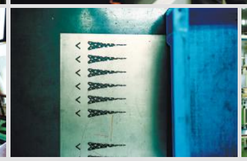
竹内 良造
（竹内光学工業・会長）

竹内 公一
（サンオプチカル・代表取締役）

水野忠佳
（シャルマン・ゼネラルマネージャー）

伊藤 智明
（シャルマン・製品開発部）

西川 義孝
（三工光学・常務）



1_ 竹内光学では、70近いお歳の職人がめがねを高速回転するバフに当てて黙々と研磨している。熟練の職人にしかできない技術も多いという　2_ わずかな誤差が命取りになるめがね。三工光学でも検品作業が念入りに行われる　3_ 三工光学の工場。最大300ものの工程を経て作られるめがねは部品の数も膨大。手作業のプロセスも多い

鯖江めがねの特筆すべき点は、職人の技術力の高さ。そしてその根底にあるのは、日本人ならではの気質だ。シンプルなパーツの中に作り手の想いや美意識が凝縮され、そこには全くムダがない。手を抜けない、手が抜けない。それが“鯖江のめがね”の世界観なのである。

私たちの顔の一部分ともいえるめがねは、視力を矯正するだけでなく、見た目の印象を左右する重要なファッションアイテムの一つ。丈夫で、かけていることを忘れてしまうようなフィット感や軽さを実現するため、数ミリ単位の誤差が掛け心地の差に大きく関わるなど、実は、めがね作りはかなり繊細な技術を要する。皆さんは１本のめがねがどのようにできているのかをご存知だろうか？　なんと、めがねは最大300もの工程を経て作られるもの。部品を作る、金型を作る、削る、組み立てる、ロウ付けする、研磨する、メッキする、塗装する……など、これらの工程一つひとつは専門の職人たちによる分業で成り立っている。つまり、めがねとは職人たちの技術が詰まったプロダクトなのだ。

また、職人の技術だけではなく、新素材や技術開発にも余念がない。1981年に世界で初めて、軽くて丈夫なチタン製めがねの開発と生産を開始。世界の約100か国に販売する総合眼鏡フレームメーカーである株式会社シャルマンは、自社で形状記憶合金の開発を成功させる。「今までの合金は、ニッケルが入っていて肌に優しくなかったので、非常にしなやかで形状記憶性があるものを独自で開発しました。素材開発には10年程かかり、実用化されたのは９年前ですね。めがねの表面処理には熱がかかるので、その温度で劣化しないものを何百回も配合を変えて検証しました」と株式会社シャルマンのゼネラルマネージャー水野忠佳さん。その後、株式会社シャルマンでは、新素材エクセレンスチタンとレーザ微細接合技術の開発に成功し、現在ではめがねフレームの開発で培った精密加工技術を活かし、チタン製品を中心とした高品質の手術機器も開発し医療に貢献している。こうしたメーカーによる技術の進歩もあって、鯖江は国際的なめがねの産地としての地位を築き、品質の高い鯖江のめがねは、世界中から注目を集めることとなった。さらに、産地統一ブランドとして「THE291(ザ ふくい)」を創設するなど、さらなる技術と独自性を世界へ発信している。

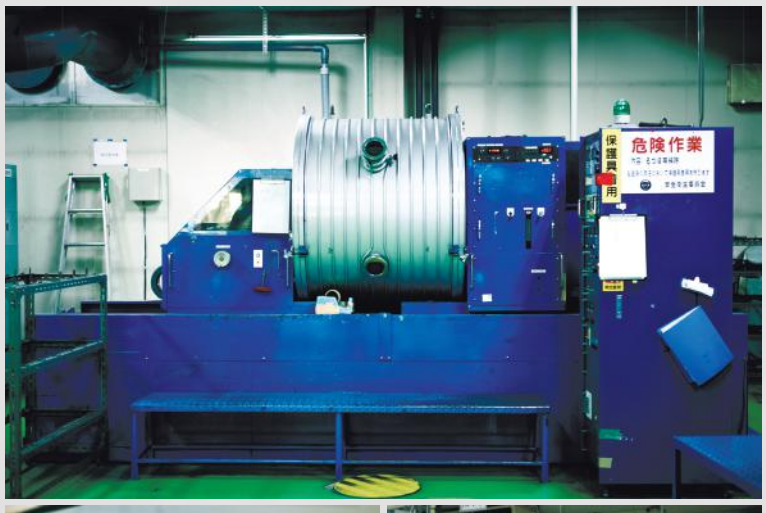
お客様に合わせて、めがねを繊細に調整できるところも、技術力の高さが分かる特徴の一つ。古くから、「それぞれの個性に合わせためがねを提供したい」という思いが産地全体に深く根付いている。サンオプチカル株式会社では、顔骨格に合っためがねをパソコン上でシミュレーションし、世界に１枚の「オンリーワン」のめがね（プラ枠、メタル枠、べっ甲枠）のオーダーを請け負う。「お客様の顔を思い出しながら作った結果、要望通りのものができた時は最高です。事前に行ったシュミレーションに、出来上がっためがねがピタッとはまると、感激してしまいます」とサンオプチカル株式会社代表取締役の竹内公一さんは笑顔で言った。

そして、めがねづくりに忘れてはいけないのが、職人同士のチームワークだ。1923年から鯖江の地でめがね作りを続ける株式会社三工光学。老舗でありながら、素材の面では業界初の取り組みなどを次々と実施してきた開拓者でもある。「実際に使用するフレームの特徴を、職人だけでなく社員全員で共有しています」と株式会社三工光学常務の西川義孝さんは語る。やはり、同じゴールに向けての連携は欠かせないのだそう。

また、竹内光学工業株式会社では、品質の保持とお客様への安心を届けるため、デザイン開発から完成品まで、一貫生産を行っている。そして、3Dを始め4D、5Dの精密加工のような現代的な技術と独特の生産システムでめがねフレームを製造している。「ディテールを変えるだけで、めがねの印象が大きく変わる。とにかく言葉のキャッチボールが大切なんです」と竹内光学工業株式会社代表の竹内良造さん。

デザインがとにかくカッコよくても、機械技術では再現できない。技術はあっても、それにかなうような素材がない。など、理想のめがねづくりには頭を悩まされることも多い。けれど、現場からの声も積極的に取り入れ、オーダーメイドでもOEM商品でも知恵とノウハウを生かした最高品質のめがねを提供するため、メーカーごとに日々勤しんでいる。「デザイナーが描いた図面を量産することができるのが100点満点ですが、現場の職人の声を聞き、最終的に120点のアプトプットを目指しています」と産地最大企業である株式会社シャルマン製品開発部の伊藤智明さんは語った。こうして出来上がった鯖江のめがねは、デザインだけでなく、歴史や技術によって磨き上げられた日本を代表するプロダクト。だからこそ、鯖江のめがねは、時代を超えていつまでも私たちの生活に寄り添い、豊かにするものなのかもしれない。

ファッション性と耐久性を兼ね備え、最大300もの工程を経て作られる鯖江のめがね。厳密で、繊細で、しかも柔軟な強さをもつ機能美は、隅々にまで妥協を許さない職人たちの実直さが光っていた。



1_株式会社晃梅オリジナルのセルヤスリ。職人の手作業で作られており、目詰まりしにくく、良く削れる　2_株式会社晃梅では大型製造機械の改修も行い、中古品として販売している

COOPERATION 産地を支える縁の下の力持ち

Cooperation

Interviewee

黒田 聡
（アイテック・取締役）

梅村 俊彦
（晃梅・専務）

Company

アイテック株式会社
福井県鯖江市神中町2-6-8
www.eyetec.co.jp

株式会社晃梅
福井県鯖江市丸山町1-1-21
kohbai.com

500社近い関連企業が集積し、国産めがねの9割超を生産している鯖江市。もともとめがねの生産は分業制であり、一社で全ての工程をまかなっているところは珍しい。一部の工程を専門会社へ外注することが一般的だ。鯖江のめがね製造に欠かせない、縁の下の力持ちがいる。

アイテック株式会社は、1948年の創業当時より、めがねフレームの装飾用金属めっきを中心として、表面処理全般の加工を行ってきた。フレームの表面処理では国内トップシェアを維持。また、表面処理だけでなく、クオリティーの高いめがねフレームのデザイン企画・販売も手がけている。 さらに、フレームの表面処理で培った技術力を生かし、新規事業分野として、デジタル情報家電、スポーツ用品分野製品の表面処理にも進出。金属装飾においても、金属めっき、真空めっき、吹付塗装、電着塗装など、多種多様な表現を可能としている。

一方、株式会社晃梅は、1960年代に福井県今立郡を中心に梅忠商店としてヤスリの行商をしたのがそもそもの始まり。今では、めがね製造に欠かせない専用フライス機やナライ加工機などの機械や切断機、ヤスリ、ヤットコなどの工具・バフ布や研磨剤、加工用薬品などの消耗資材を取り扱っている。独自に開発した商品を中心に、福井・鯖江で60年以上にわたり利用され、200以上あると言われるめがねの製造工程の全てで使われている商品もある。

こうした専門会社の存在がめがねづくりには不可欠。しかし、時代や流行に応じて、めがね作りも大きく変化をしている。使用する機械や部品の変化はもちろんのこと、同じ製品を大量に量産する方向から、多品種を少ないロット数で作ることが求められるようになった。また、部品自体が細分化されたことで、要望も増えたという。しかし変わらないものもある。それはお客様と専門会社との密なコミュニケーションだ。昔も今も、その時代に合っためがねを考えていく上で、これだけは変わらず大切にし続けている。「悩むことは増えているかもしれませんが、お客さんと一緒に悩むことで、意外と解決できることも多くあります」とアイテック株式会社の取締役の黒田聡さんは言う。新しく出てくる要望をどうやって解決するか、お客様と一緒に悩むことは、めがねづくりには欠かせない。未だ、営業スタイルは対面販売式を貫いているのもそのせいだ。「実際、お客さんの声から生まれた発見もある。意見をいただき、常に改良を重ねている」と株式会社晃梅の専務取締役の梅村俊彦さんは話してくれた。世界に通ずる技術力の背景には、長年の経験と実績を誇る職人達のクラフトマンシップが息づいている。そして、実直なものづくりをする彼らこそが、鯖江のめがねを支えているのであった。

DESIGN デザインの鯖江になるために

Design

新しい時代の鯖江のめがねを支えるのはデザイン力。さらに多くの人に親しまれるようになるためには、産地全体として長く飽きずに使える、時代や流行にも流されない独自のデザインについて考えていく必要がある。そんな中、近年よりめがねの伝統を大切にしながらも新しいスタイルに挑戦するブランドも登場。優れた品質とデザインを兼ね備えた、未来のめがねの形とは。

「元々、地場のお客様が多かったので、自分たちが発信していく方法を知らなかったんだと思います。でもそれではダメだと、12年ほど前からオリジナル商品を開拓していくことに決めました」と株式会社エクセル眼鏡で企画デザインを担当する横山憲吾さんは言う。株式会社エクセル眼鏡では、マーケティングから企画・デザイン・製造にまで至る一貫体制を確立。トップブランドを担うめがねフレームを高い技術水準と優れたコスト対応力で提供している。社内は4人のデザイナーで構成され、OEMを主体にここ数年でオリジナル商品も手がけるまでに成長した。

また、株式会社ボストンクラブでは、創立時からめがねフレームのデザイン企画会社として、アパレルメーカーや眼鏡商社のOEMを数多く手掛けてきた。その経験を礎に、鯖江にある世界水準の生産技術を取り入れた日本産めがねとして、ハウスブランドを発表するなど、オリジナル商品にも力を入れている。「図面を書く職人はいたけれど、元々めがねのデザイナーはいなかった」と、株式会社ボストンクラブ代表取締役の小松原一身さん。24年ほど前よりデザイナーを採用し、機能性、オリジナリティ、ファッション性にさらに磨きをかけることに。OEMのブランドとコラボしながら、オリジナリティを探す日々だったとか。株式会社ボストンクラブでは、デザイナー自ら、デザインしためがねの部品や加工一つひとつを細かくチェックし、最後まで自分で作りあげることを大切にしている。こうして出来上がっためがねは、「めがね一つのデザインの中に鯖江が見えます」と株式会社ボストンクラブのデザイナー・山根剛さん。努力の末、現在ではめがねのデザイン企業に成長し、時代に合わせたデザインを常にアップデートし続けている。一方、海外でのデザイン研修を行う企業もある。前述の株式会社シャルマンでは自社のデザイナーを海外に派遣し、国外のデザインを積極的に学ばせている。株式会社シャルマンデザイナーの舛田洋輔さんは、「海外では、めがねのシェイプ一つにしても全く考え方が異なります。国によってのデザインや感覚の違いを実感し、それをデザインに落とし込むのは非常に勉強になりました」と話してくれた。

めがねとは、機能面とビジュアル要素が欠け合わさったプロダクト。そこには純粋なるデザインの面白さがある。「車だとスタイリングがかっこいいとか、デザインし終わった瞬間にプロダクトの良さがわかる。でも、めがねはかけてみないとわかりません。一人ずつ耳の高さや位置も違うので、できた時はまだ答えがないんです。でも、それが面白い。かっこよくても似合うか似合わないかは別の話という部分が奥深いですね」と株式会社エクセル眼鏡で企画デザインを担当する安井利彰さんは話した。今やデザイナーが、ただ、めがねをデザインする時代ではない。彼らにはコストや作った後のマーケティングまで見据えて考えることが求められている。重要なのは、デザイナーは図面を書くだけでなく、製造担当者とコミュニケーションをとりながら部品や器具を選び、めがね作り上げていくこと。全てを俯瞰した上でのデザインやアプローチ。質とデザインの両立。時代を超えても飽きのこないめがねを作るためには、何よりもじっくりとめがねそのものを理解することが大切なのだ。１個１個のめがねの背後にあるお客様の顔、仕事や暮らし、ライフスタイルを考えためがね作り。デザインの鯖江になるため、これからの地場産業をさらに盛り上げていきたいと、奮闘するデザイナーたちの姿がここにあった。

Company

株式会社エクセル眼鏡
福井県鯖江市神中町2-5-12
www.excel-opt.co.jp

株式会社ボストンクラブ
福井県鯖江市三六町1-4-31-2
www.bostonclub.co.jp

Interviewee

小松原 一身
（ボストンクラブ・代表取締役）

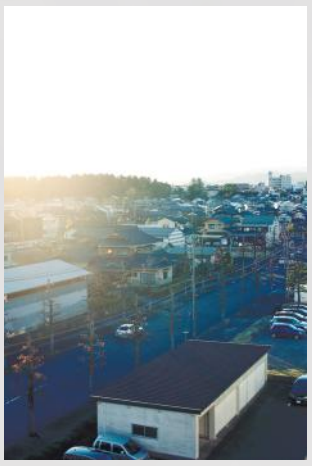
山根 剛
（ボストンクラブ・デザイナー）

安井 利彰
（エクセル眼鏡・企画デザイン）

横山 憲吾
（エクセル眼鏡・企画デザイン）

荒谷 明日香
（エクセル眼鏡・企画デザイン）

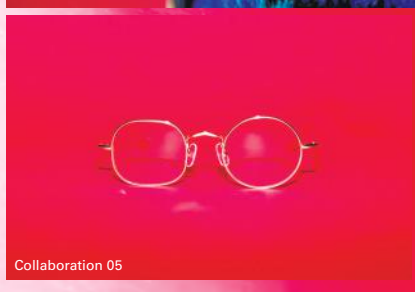
舛田 洋輔
（シャルマン・チーフデザイナー）



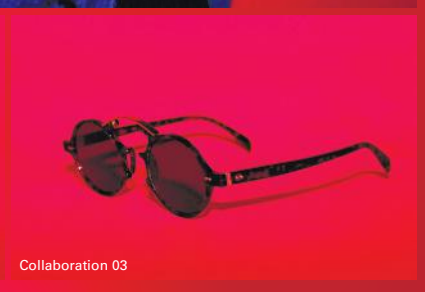
1_株式会社ボストンクラブではビンテージめがねも大切に保管し、鯖江めがねの歴史をアーカイブしている　2_株式会社ボストンクラブのオフィスビル１階にはオリジナルブランドを扱う直営店がある

RAW TOKYO Collaboration Glasses

めがねが果たす役割が変わってきている。
本来は視力の補助が大きな役割だったが、
今はめがねをかける人を表象する
ファッションツールとしての側面が強くなりつつある。
流行やトレンドを超えた、人々のスタイルに合った
多様性がめがねには求められている。
TOKYO MEGANE FESTIVALでは鯖江のめがね製造企業が、
東京のヴィンテージショップなどが会するマーケット
RAW TOKYOとコラボレーションをして、オリジナルめがねを制作。
東京のヴィンテージショップは、いま生きる時代の目線で、
時代を超えて残り続ける物たちを常に切り取り続けてきた。
彼らの感覚と鯖江の技術力をマッチングさせることで、
未来にヴィンテージとして残るめがねを目指した。



Collaboration 05



Collaboration 03

Sabae

竹内光学工業株式会社
福井県鯖江市杉本町35-150-1
takeuchi-opt.co.jp

水島眼鏡株式会社
福井県鯖江市落井町43-71
miz-opt.com

株式会社ボストンクラブ
福井県鯖江市三六町1-4-31-2
www.bostonclub.co.jp

KISSO
福井県鯖江市丸山町4-305-2
kisso.co.jp

Tokyo

OZ VINTAGE
東京都渋谷区神宮前6-23-11
J-SIXビル4F
www.instagram.com/oz.vintage

Aquvii
東京都渋谷区代官山町2-5
www.aquvii.com

ARMS CLOTHING STORE
東京都目黒区祐天寺2-12-1
armsclothingstore.com

DOARATGoodGear
www.doarat.net

KINSELLA
東京都渋谷区神宮前3-27-13
www.kinsellatokyo.com

RAW TOKYO Collaboration Glasses

Collaboration 01
株式会社ボストンクラブ × KINSELLA

原宿のとんちゃん通りで80's~90's古着ブームを牽引し、今も新たな流行を発信し続けるKINSELLAとは、シンプルながらもKINSELLA独自のスタイルにもよく馴染む、コーディネートが楽しみなめがねを制作。

Collaboration 02
株式会社ボストンクラブ × DOARATGoodGear

東京のストリートファッションが盛り上がりを見せ始めた初期から活躍するDOARATのニューブランドDOARATGoodGearは、独特の感性から産み出されたセルフレームデザインのめがねを制作。

Collaboration 03
竹内光学工業株式会社 × OZ VINTAGE

洗練された審美眼でファッション好きな人々から圧倒的な人気を誇る古着屋OZ VINTAGEは、繊細なメタル加工技術を持つ竹内光学工業株式会社とコラボレーション。都会的でエレガントさのあるめがね。

Collaboration 04
株式会社ボストンクラブ × ARMS CLOTHING STORE

Made in Japanにこだわり、様々な個性的アイウェアを国内に留まらず世界へも送り出すボストンクラブは、西海岸の雰囲気を感じるこだわりのアメリカ古着で根強い人気を誇るARMS CLOTHING STOREオーナーのリクエストを忠実に再現。

Collaboration 05
水島眼鏡株式会社 × Aquvii

アクセサリーや洋服など、ユニークなオリジナルデザインを世に送り出しているAquviiと、生産工程全てを自社で行い、貴金属加工にも信頼の厚い水島眼鏡株式会社は、その長い歴史と技術に裏付けられた品質と、他とは一味違うデザインが融合しためがねを制作。

Collaboration 06
KISSO × Aquvii

眼鏡材料商社でありながら、めがねのセルフレームと同じアセテート素材を生かした可愛らしいアクセサリーが人気のKISSOは、Aquviiと大振りでクールなアクセサリーを制作。スタイリングの中心に置けるインパクト抜群のデザイン。

Collaboration 07
株式会社ボストンクラブ × Aquvii

Aquviiが兼ねてからあたためていためがねのアイデアを実現した。よく見ると左右が非対称。個性的だが、思わず掛けてみたくなるデザイン。

TOKYO MEGANE FESTIVAL

2018年11月30日(金)
17:00~21:00 at COMMUNE 2nd
2018年12月1日(土)~2日(日)
11:00~17:00 at RAW TOKYO
主催: 鯖江商工会議所
協賛: 一般社団法人福井県眼鏡協会

いままで、めがねにおいて産地というものは
あまり注目されてきませんでした。
しかし、そこには歴史とともに培われてきた
知られざる技術力、そしてデザイン力があります。
それら産地のめがねの魅力に触れることができるのが、
TOKYO MEGANE FESTIVALです。

RAW TOKYOとのコラボレーションにより、
ヴィンテージめがねに新たな視点を取り入れた
再生デザインを提案。
スタイルを通して、日本製のめがねの持つ魅力を
多角的に体感できる場となります。
日本のめがねスタイルが世界に
発信されていく土壌をここから。

RAW TOKYO

海外に行くと、時にその街の全てを感じられるようなマーケットに出くわします。RAW TOKYOは“生 (RAW)”の東京を表現する、東京各地のヴィンテージセレクトショップをはじめとした店舗が一堂に会するマーケットです。 世の中に溢れたモノの中で、東京に集まったモノをreuseしていく。自分が選ぶ、自分が信じられるモノがここにはあります。

毎月第一土日11:00~17:00
東京都渋谷区神宮前5-53-70
Farmer's Market @ UNUと同時開催

COMMUNE 2nd

東京の中心地・青山で、既存の考えに捉われない新しい価値を作り、発信していくリアルなスペース。未来のデザイン感覚、未来の學び、食の未来を探して、未来のアンテナを持った人が集います。10を超えるフードカートなどの飲食店、ワークスペース・ギャラリー“みどり荘2”、学びの場”自由大学”が、敷地中央の大きなドームを囲んでいます。

11:00~22:00
(定休日なし ※年末年始を除く)
東京都港区南青山3-13

TOKYO MEGANE FESTIVAL paper

Published by TOKYO MEGANE FESTIVAL / The Sabae Chamber of Commerce and Industry tokyomeganefestival.com
Edit: Media Surf Communications Inc. | Art Direction, Design, Illustration: Shinpei Onishi | Photo: Tomohiro Mazawa | Text: ten_to_sen (p.3-7) | Models: Norma Aratani, Hiroki Hara | Styling: Satomi Suzuki (for Norma Aratani)